

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：32618

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720210

研究課題名(和文)近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷に関する言語類型論的研究

研究課題名(英文)A Typological Study of the Development of Tense, Aspect, and Modality system for Last 500 Years

研究代表者

福嶋 健伸 (FUKUSHIMA, Takenobu)

実践女子大学・文学部・准教授

研究者番号：20372930

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主に以下の点を明らかにした。

[1] 近代日本語の類型論的な変遷は、「ムード優位言語(Mood-prominent language)としての特長を失う」方向であると指摘できる。[2] 上記1の背景には、「～テイルの発達」と「動詞基本形の分布のシフト(<現在(現実:Realis)>から<未来(非現実:Irrealis)>へのシフト)」が関与している。[3] つまり、これまで誰も指摘してこなかったことであるが、かつて盛んに用いられていた～ム系統の形式(中世末期日本語では～ウ・～ウズ(ル)等の形式)が、使用されなくなることの背景には、「～テイルの発達」が関与しているといえるのである。

研究成果の概要(英文)：The conclusion of this study is as follows.

[1] Old Japanese was a Mood-prominent language. But gradually, Japanese lost the features of a Mood-prominent language. Contemporary Japanese is no longer a Mood-prominent language. [2] The "Development of -teiru" and the "Shift of root form of Japanese verb (from Realis to Irrealis)" take place in the background of this transition. [3] That is, The "Development of -teiru" and the "Decrease of mood forms(ex. -mu or -u)" do not take place independently.

研究分野：日本語学

 キーワード：言語類型論 (typology) テンス・アスペクト モダリティ・ムード 中世末期日本語 日本語の変遷
 Mood-prominent language Tense-prominent language 国際情報交換(米国:Seattle)

1. 研究開始当初の背景

(1) 国外の研究動向について述べると、主に欧米諸語においてテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を明らかにする研究が盛んであり、大きな成果が挙げられている(Bybee et al. 1994)。

(2) しかし、アジア諸語では研究が遅れており、特に日本国内においては、当該体系の変遷に関する研究は、事実上、皆無である。国際的レベルから見ると、日本のこの状況は大幅に遅れており、早急に研究を進める必要があった。

2. 研究の目的

今回の申請の目的は、近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷のあり方を言語類型論的に考察し、日本語の変遷が、言語類型論的にみてどのように捉えられるのかを明らかにすることである。また、研究成果を英語の論文で発信することを目指す。今回の報告書では、前者について中心的に述べたい。

3. 研究の方法

(1) 中世末期日本語の資料としては、キリシタン資料、狂言資料(大蔵流の虎明本や和泉流の天理本等)等のような、言語学において信頼性の最も高い一級資料を調査した。

(2) 必要に応じて、中古日本語の資料として『源氏物語』『枕草子』等を調査した。また、現代日本語を調査する場合もあるが、こちらは、「1950年以降に、東京で生まれ、何らかの賞を受賞している作家の作品」に限定して調査を行った。このように限定した方が、確実なデータが採集できると判断したためである。

4. 研究成果

(1) 中古日本語は、言語類型論的というと、ムード優位言語(Mood-prominent language)である(厳密には、アスペクト・ムード優位言語(Aspect-Mood-prominent language)の可能性もあるが、本研究では、ムード優位言語であったということが重要であるので、この点を強調したい)。なお、このムード優位言語等の概念は、Bhat(1999)による。

古代日本語が、ムード優位言語であったこと(具体的には、～ム等の有無によって、<現実:realis>/<非現実:irrealis>とを、ほぼ義務的に表し分けていたこと)の背景を考える上で、鈴木(1992)や福嶋(2004・2011ab)が指摘したような、動詞基本形を含めた体系的な視点が重要となる。古代日本語

や中世末期日本語においては、unmarkedな形式である動詞基本形の分布は、(現代日本語に比べて)<現在>、つまり<現実:realis>の領域に偏っているわけであり、<非現実:irrealis>の領域(例えば<未来>等)には、あまり分布していないのである。よって、<非現実:irrealis>の領域に関して何か言及したい場合には、従属節であれ主節であれ、<非現実:irrealis>を表す形式(典型的には～ム)を用いる必要があったといえる。

(2) 中世末期日本語においても、～ウ・～ウズ(ル)による、<現実:realis>/<非現実:irrealis>の区別はかなり義務的なものであり、この時代も、まだ、ムード優位言語(Mood-prominent language)であったといえる。中世末期日本語の動詞基本形の分布は、古代日本語ほどではないものの、依然として<現在>に傾いている。では、<未来>の出来事(<非現実:irrealis>の領域の一部)について言及している場合に、どのような形式が分布していたのかというと、意志・推量を表す形式(古代日本語の～ム・～ムズの後継の形式)、～ウ・～ウズ(ル)が広く分布しているのである(福嶋2011a)。

しかし、この時代から、～テイルという形式が台頭してくるのも事実であり、ムード優位言語の特徴が崩れ始める兆しを見ることができるといえる。

(3) 現代日本語になると、「～テイルの発達」とともに、「動詞基本形の分布のシフト(<現実:realis>から<非現実:irrealis>へのシフト)」が起こり、ムード優位言語の特徴が崩れ去る。つまり、かつての時代のように、<非現実:irrealis>の事態、例えば、<未来>の出来事を表現する場合に、～ムや～ウ・～ウズ(ル)等のようなモダリティ形式を使用する必要がなくなったわけである。

(4) ここにおいて、～ムや～ウ・～ウズ(ル)等のようなモダリティ形式の減少と、「～テイルの発達」を結び付けた、体系的かつ類型論的な記述が可能となる。このような視点は、従来の研究ではなかったものである。

(5) ムード優位言語の特徴を有していた古代日本語と中世末期日本語は、各節ごとに、<現実:realis>/<非現実:irrealis>を表し分けており、<非現実:irrealis>の領域について述べる場合には、～ムや～ウ・～ウズ(ル)等を、ほぼ義務的に用いる必要があった。この背景には、「～テイルが未発達である(あるいは、～テイルに相当する形式が存在しない)」ことと、「動詞基本形が<現在>に分布しており、そもそも<非現実:irrealis>の領域を表しにくかった」という状況があったのは、既に述べた通りである。それが、ムード優位言語の特徴を失い、各節ごとに、<現実:realis>/<非現実:irrealis>を表し

分ける必要がなくなる。各節ごとの表し分けがなくなれば、一部の従属節の独立性が低くなっても不思議ではないのではなからうか。このように考えると、日本語の変遷を考える際には、従属節の独立性（従属節の従属度）という統語的な問題を考える必要がでてくるのである。

(6)本研究では、～タ/動詞基本形/～テイル/～ウ・～ウズ(ル)が体系をなしていると捉え、言語類型論的な観点から日本語の変遷を記述した。では、本研究の成果はどのような研究につながっていくのだろうか。以下では、本研究に関連する(可能性がある)いくつかの研究について述べ、研究の広がりを示したい。一見全く関係がないようにみえる研究もあるが、本研究の成果によって、それらが繋がってくる可能性が出てきたのである。

(7)まずは、「相対テンス」というシステムとの関連である。古代日本語では、「絶対テンス」的要素が比較的強く、現代に近づくにつれ「相対テンス」というシステムが台頭してくることは、よく知られている。相対テンスは、一般的に、主節時との関係で決まるものであり、絶対テンスは発話時との関係で決まるものである。よって、相対テンスというシステムの台頭は、主節の従属節に対する支配が強くなったことを示している可能性がある。

(8)2つ目は、肯定可能の成立との関連である。吉田(2012)は、「る・らる」の肯定可能の展開を検討し、「非現実の事態を表す形式がなくても無標形で非現実事態を表せるようになった(吉田2012:206)」ことをポイントとしている。このことを踏まえると、「～テイルの発達」及び「動詞基本形の分布のシフト」と、「肯定可能の成立」とが繋がってくる可能性がある。「肯定可能の成立」は、日本語史上重要なテーマであるが、一見、全く関係がないように思われる、「～テイルの発達」と「肯定可能の成立」が、体系的にみると繋がってくる可能性があるということは、非常に興味深いと思う。

(9)3つ目は、現代韓国語との関連である。何といっても、現代韓国語と中世末期日本語の対照が興味深い。現代韓国語と中世末期日本語は、一見、全く無関係にみえるが、福嶋(2011ab)や本研究が示したような体系的な視点をとれば、両者の類似性を見てとることができる(現代日本語よりも、中世末期日本語の方が、現代韓国語に近いシステムを有しているのである)。既に、安・福嶋(2005)において、両言語のテンス・アスペクト体系の類似性は指摘できており、ムードも含めた観点からの研究がまたれるところである。

(10)4つ目であるが、現代韓国語との対照を

考慮すると、一見無関係にみえる安部(2009)の「名詞優位化」との関連が気になる。Bhat(1999)は、テンス優位言語の場合、形容詞の表現手段が動詞と乖離する(例えば、名詞と近くなる)傾向があることを指摘している。この指摘を受け、ナロック(2005)は次のように述べている。

もし日本語史の中で形容詞に比べ(名詞的である)いわゆる形容動詞が増えているなら、それもテンス優位への変化の一つの証と見なすことができる。

(ナロック 2005:9)

この指摘と、安部(2009)の以下の指摘は、無関係なのだろうか。

特徴②「形容語」として、形容詞の比重は、上代・中古までは高かったものが、中世以降徐々に低下していき、代わって、特に近代以降は「名詞(主に漢語)だ」型のいわゆる形容動詞の比重が高まっていく。(名詞優位化) (安部 2009:90)

当然、これは、漢語の流入に関する問題でもあり、漢語サ変動詞の増加とともにみられる傾向である。よって、(漢語が流入しただけのことであり)形容動詞の増加と、言語の種類とは、一見無関係であるようにも思える。しかし、韓国語と対照した場合、「漢語の流入」と、「漢語をどのように取り込むか」は、別の問題であることに気付く。現代日本語・現代韓国語ともに、漢語(サ変)動詞は存在する。「漢語+する/하다」のようなものである。ここまでは、両言語に共通している(漢語の流入は、両言語にみられる)。ところが、漢語を形容詞的に取り込む場合には、大きな差が生じる。日本語では、形容動詞として、どちらかというとな詞に近い形で取り込んでいるのに対し、韓国語では、「漢語+하다」のように、動詞に近い形で取り込んでいるのである。

あくまでも可能性の1つであって、慎重な態度が必要だと思われるが、今後、安部(2009)等の語彙史研究の成果と、本稿のような、「～テイルの発達」と言語類型的变化を考える研究が、接点を持つこともあり得るように思う。

<引用文献>

- ① 安部清哉(2009)「第3章意味から見た語彙史— "パーツ化""名詞優位化"」『語彙史』pp.73-104. 岩波書店
- ② 安平鎬・福嶋健伸(2005)「中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系—存在型アスペクト形式の文法化の度合い」『日本語の研究』1(3):139-154. 日本語学会
- ③ Bhat, D.N.S. (1999) *The Prominence of Tense, Aspect and Mood*. Amsterdam: Benjamins.
- ④ Bybee, JoanL.,Revere Perkins, and

William Pagliuca. (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.

- ⑤ 福嶋健伸(2004)「中世末期日本語の～テイル・～テアルと動詞基本形」『國語と國文學』81(2):47-59. 東京大学国語国文学会
- ⑥ 福嶋健伸(2011a)「中世末期日本語の～ウ・～ウズ(ル)と動詞基本形—～テイルを含めた体系的視点からの考察」『國語國文』80(3):44-64. 京都大学文学部国語学国文学研究室
- ⑦ 福嶋健伸(2011b)「～テイルの成立とその発達」『日本語文法の歴史と変化』pp. 119-149. くろしお出版
- ⑧ ナロック=ハイコ(2005)「言語類型論から見た日本語文法史」『國語と國文學』82(11):1-12. 東京大学国語国文学会
- ⑨ 鈴木泰(1992)『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析』ひつじ書房
- ⑩ 吉田永弘(2012)「「る・らる」における肯定可能の展開」『日本語学会 2012 年度春季大会予稿集』pp. 199-206.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① Toshiyuki Ogihara & Takenobu Fukushima, Semantic properties of the so-called past tense morpheme in Late Middle Japanese, *Journal of East Asian Linguistics*, 査読有, 24-1, 2015, 75-112, DOI: 10.1007/s10831-014-9124-8
- ② 福嶋健伸、従属節において意志・推量形式が減少したのはなぜか—近代日本語の変遷をムード優位言語からテンス優位言語への類型論的変化として捉える、『日本語複文構文の研究』、査読無、ひつじ書房、2014、347-382、ISBN-13: 978-4894766754
- ③ 小野真依子・漆田彩・北見友香・竹原英里・福嶋健伸、日本語学の研究を英語論文の参考文献欄に書く場合その 3—*Journal of East Asian Linguistics* では、どのように論文を引用しているか—、『実践國文學』(実践国文学会学会誌)、査読有、83 号、2013、1-19、ISSN:0389-9756
- ④ 北見友香・竹原英里・小野真依子・漆田彩・福嶋健伸、日本語学の研究を英語論文

の参考文献欄に書く場合その 4—著者名と発行年の示し方—、査読有、83 号、2013、20-24、ISSN:0389-9756

- ⑤ 漆田彩・北見友香・竹原英里・小野真依子・福嶋健伸、日本語学の研究を英語論文の参考文献欄に書く場合その 1—*Journal of East Asian Linguistics* では、どのように単行本を引用しているか—、『実践國文學』(実践国文学会学会誌)、査読有、82 号、2012、1-20、ISSN:0389-9756
- ⑥ 竹原英里・小野真依子・漆田彩・北見友香・福嶋健伸、日本語学の研究を英語論文の参考文献欄に書く場合その 2—名前—の書き方と四つ仮名—、『実践國文學』(実践国文学会学会誌)、査読有、82 号、2012、21-25、ISSN:0389-9756

[学会発表] (計 3 件)

- ① Ogihara, Toshiyuki & Takenobu Fukushima, Semantic Properties of the so-called Past Tense Morpheme - *ta* in Late Medieval Japanese, Workshop on Tense and Aspect in Korean and Japanese, Location: Seoul National University, 2012-06-07, ソウル (韓国) ソウル大学
- ② 福嶋健伸、中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系—名詞節内にモダリティ形式が生起することをどう解釈するか—、大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所「複文構文の意味の研究」研究発表会、2012-05-13、学習院大学 (東京都・豊島区)
- ③ 福嶋健伸、中世末期日本語の従属節の階層性—南の四分類との関係—、大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所「日本語文法の歴史的研究」研究発表会、2013-03-27、JR 博多シティ (福岡県博多市)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福島 健伸 (FUKUSHIMA, Takenobu)
実践女子大学・文学部・准教授
研究者番号：20372930

(2) 研究分担者 該当者なし。
()

研究者番号：

(3) 連携研究者 該当者なし。
()

研究者番号：